

社会現象としてみた2003年9月の南関東地震予報

Southern Kanto earthquake forecast in September 2003: facts and evaluation

早川 由紀夫[1]

Yukio Hayakawa[1]

[1] 群馬大・教育

[1] Faculty of Ed, Gunma Univ

<http://www.edu.gunma-u.ac.jp/~hayakawa/bosai/fm/report.html>

電磁気学的な地震予知と串田FM電波法

日本の地震学界において、電磁気を利用した地震予知はあまり信頼されていない。VAN法を用いた地震予知がギリシャで成功していると伝えられるが、その成功を認めない地震学者のほうがむしろ多数派であろう。こういった背景の中、串田さんが2003年9月7日21時頃にインターネットのホームページで、「9月16,17日±2日に南関東でM7.2の地震が起こるかもしれない」と明記した予報を公表した。

串田FM電波法の信頼度

串田予報の的中率の評価はまだ定まっていない。よく当たると評価するひともしれば、とくによく当たっているわけではないと評価するひともある。串田予報にまつわる関連情報の流通をよくする努力を含めて、さらに詳しい検討が必要である。

また、出した予報が当たったかどうか(的中率)だけでなく、地震の前に有効な予報が出せたかどうか(警告率)を評価することも必要である。吉野ほか(1999)によると、串田予報の警告率は9%であるという。

串田予報の心理学的考察

認知心理学者である菊池(1998)は、古今東西に現れた大予言者たちが唱えた予言に次の特徴が多かれ少なかれ認められることを指摘した。

- ・ たくさんの予言をする。予言を受け取ったひとは、当たった予言に強く印象づけられ、外れた予言はまもなく忘れ去られる性質を利用する。
- ・ あいまいな予言をする。理由を後付けして、予言が当たったことにしてしまう。
- ・ できるだけ反証されにくいかたちで予言する。
- ・ 予言が当たった証拠を強調する。ひとはふつう、予言がはずれた証拠を探すよりも、予言が当たった証拠を探す性質がある。この確認バイアスを利用して、はずれた証拠から目を遠ざけさせる。
- ・ 予言を多数のひとに受け取ってもらい、その中から、当たったと感じてくれる人の声をすくい上げて喧伝する。
- ・ 悪いことを予言する。悪い予言がはずれたとき、ひとは、「悪いことが起きなくて、よかった」と、予言の失敗責任を追及することなく、むしろ感謝する。
- ・ 人命を救うなどの普遍的正義に沿った予言を行う。はずれても、必要やむをえない警告だったと許してもらえる。

串田さんが今回公表している一連の南関東地震予報を読んだだけでも、その中に上に挙げた特徴のいくつかを認めることができる。

過去の予報レポートは、いま、ホームページで飛び飛びの番号で部分公開されている。公開されている予報レポートにも黒で塗りつぶして読めなくしてある箇所がある。会員に送信された予報ファクスを一定期間分すべて入手できなければ、的中率や警告率の統計学的検証だけでなく心理学的検証も十分にはできない。それが可能となっていない現状では、統計学的判断は留保するとして、上記の心理学的考察が突きつけた状況証拠を私は無視することができない。

ホームページで公開されている地震前兆検知公開実験の参加規約によると、会員が過去の予報ファクスを他者に手渡そうと欲するとき、事前に串田さんの許可を得なければならないことになっている。いまとなつては、串田さんは、この縛りをすみやかに解除する社会的責任があろう。

なお串田予報の的中率の高さが、心理学的バイアスによるみかけの現象だったとしても、串田さんが観測している信号の中に地震前兆が隠されている可能性を否定しない。その可能性は、別途検討されるべきである。